2024ジェンダー平等ミーティング

ジェンダー平等ミーティング

令和6年度
若い世代からの
ジェンダー平等
推進事業

2024年7月20日（土）テーマ

「メディアとジェンダー」

G-NETしが
じーねっと
滋賀県立男女共同参画センター

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

5 ジェンダー平等を実現しよう

「メディアとジェンダー」

いま求められるジェンダー表現とは？

講師：合田 文 さん（株式会社TIEWA代表取締役）

・ジェンダーやセクシュアリティ、フェミニズム、LGBTQ＋、性教育などについて、実話をもとにした1分で読めるマンガで解説するメディアを運営している（パレットーク）

・さまざまな物語を追体験することで、想像したことがなかった視点を知ることができる、そのお手伝いとなるような発信

・「自分ごとじゃない」「自分はちがうよなー」という人にも届けたい

・自分たちのやりたいことをやっていく、もりあげていくということが大事だと思っている

・誰もが性別にかかわらず、平等に責任や権利、機会を分かちあえること → ジェンダー平等の実現

・多様な属性をもつ人がいるのは当たり前。ただ、なにもしなければ挑戦しようとする一人ひとりに対する機会は公平ではないし、これまで排除されてきた個人やグループは力を活かせないまま

・まず大切なのは「公平性」

・誰もがマイノリティ（立場が弱い）にもマジョリティ（立場が強い）にもなり得るが、どういう状況で自分がどうなるのか、また、マジョリティな部分ではさまざまな不平等性に気づきにくくなるということを、理解しておくことがメディアを考える上では大切

・例えば、「なぜ男性専用車両がないの？」という問いはちょっと視野がせまい。「電車内の女性」の立場を、ちょっと視野を広げて、ピントを調整して想像してみたら・・・

・会社の中などで感じるモヤモヤ、原因の多くはコミュニケーション不足

・決めつけるのではなく、どうしたいのか、どう思っているのか、きけばいい。
１０秒でできる。なのにしない。対話を！

・「子育て中のお母さんなんだから仕事は控えめに」こうした“バイアス”を
自覚せずにコンテンツを作ると不適切な表現になってしまうことも

・「自分はちゃんとわかっているか」「十分考えられているか」いつもふり返
ること

・メディア業界は未だに圧倒的男性社会。普段目にしているニュースは
圧倒的多数派の視点で取材されている

・メディア発信での重要なポイントは「どんなメディアでありたいか」。これ
までの“決めつけ”を強化していきたいのか、それともほどいていきたい
のか・・・一人ひとりの発信や発言が変わることで変化することも大きい

・自分が所属するコミュニティの雰囲気をつくっている人が、“一番のマジョリティ”。そのコミュニティにおいて、自分はどういう立場をとるべきか、どういう発信をするべきか

・もともとあるけれど正しくはない「偏見」を「発信」してしまうことで、その偏見を強め、変えていくべき価値観を肯定してしまう（不適切な表現）

・「お前彼女もいないの？男友達とばっかツルんでると、ゲイだと思われるぞ！」といった表現、“男性＝女性を好きになるもの”“男性＝女性をモノにできることが一人前”“ゲイ＝よくないもの”ということを肯定してしまうような発言になっている

・「家内がいつもお世話になっております」「君って意外とスイーツ男子なんだね」などの表現も、アップデートしていけるかもしれない（家内＝家の中で家事をする人というような表現）（スイーツや料理は女性のもの？）

・根底にある無意識の偏見は、「女性＝家事、育児（＋仕事）」「男性＝仕事、跡継ぎ、大黒柱」・・・家父長制

合田さんが大切にされている発信のポイント

- 「ステレオタイプ」は否定するために描く
- 「だわ」「よね」「だぞ」などの女性言葉/男性言葉の扱い
- 家父長制にあらゆる方向から疑問を投げかける
- 社会構造を言語化する
- 従来の表現とのバランスをとる
- ジェンダーの「従来のらしさ」の肯定や強化を避ける
- どのポジションを取るか、誰の味方をするかを決める
- 不要な「らしさ」がないかを確認する

7/20

自身のマジョリティ性、マイノリティ性へのまなざしをもつことの大切さや、
まず大事なのは「公平性」であることについて学びました。

テーマ

メディアとジェンダー

様々なケーススタディをとおして、“いま求められるジェンダー表現”への理解を深めました。

感想

・平等って何かな、公平って何かなと考える時間になった。

・自分は大分マジョリティの方に寄っているんだなと思った。マイノリティ側の視点に立って物事を考えることを意識していこうと思った。

・社会を緩やかに変えていければいいのかなと思った。

・偏見はある意味もってしまうものでもあるが、価値観を変えていくこと、発言する時によく考えることが大事だと思った。

・日頃の生活の中で、決めつけた表現をしたり、人を傷つけたりしていないか、しっかり考えてから発言していかなければならないと思った。

感想

・日頃の発言について、ジェンダーのバイアスがかかったものではなかっただろうかと考える機会になった。

・何気ないニュースなどでも、改めてじっくり目を向けてみると新たな気づきが広がっていくのではないかと思った。

・自分がその場のマジョリティなのかマイノリティなのか、考えながら会話などができるようになれたらと思う。

・自分の考え方のクセを、もう一度考えてみるべきだと感じた。

・その人自身をみて対話することが、平等への第一歩になるのではないかと思った。

感想

・自分の立場を十分理解した上で、他の立場にいる人に対して配慮のある言動をしていきたいと思った。

・実際の生活の中では、違和感すら感じることなく発言してしまうということもあると思うので、気をつけたい。

・今までSNSに何気ないことを投稿することがあったが、この何気ないことも、立場が違う人からすれば何気ないものではないかもしれないと気づいた。

・自分がマジョリティ側である事柄については、どうしても無頓着になりがちであることに気づかされた。発する言葉の中に、無意識の偏見を助長するようなものが混ざってしまっていないか、考えるよいきっかけになった。

感想

・マスメディア（様々な価値観を形作ることにおいて影響力大）における不適切な表現というのは、自分自身の経験に照らし合わせてみてもやはりかなりあるのではないかと思った。差別的なニュアンスを含んでいる言葉などは、なくしていくべきだと思う。

・自分が何にモヤモヤしているのか・・・ワークやケーススタディをとおして合田さんにいろいろ言語化していただいたことで、モヤモヤの原因への理解を深めることができた。

・誰もが安心して過ごせる社会が実現されるために、無意識の偏見について、自分事として捉えなければならないと感じた。

・目の前にいる人とコミュニケーションをとること、相手を気遣うことが、多様な人とともに生きていくためには大切だと改めて思った。